

国立国語研究所学術情報リポジトリ

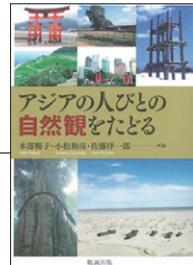
〈著書紹介〉 木部暢子,小松和彦,佐藤洋一郎
編『アジアの人びとの自然観をたどる』

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000775

木部暢子, 小松和彦, 佐藤洋一郎 編

『アジアの人びとの自然観をたどる』

2013年11月 勉誠出版 四六判 352ページ 3,800円+税



木部 暢子

1. この本の目的

この本は、人間文化研究機構の連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」の研究成果をまとめたものです。人間文化研究機構では、機構に属する6つの機関（国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館）が機関を越えてつながることにより、新たな研究の視座を開拓し、それぞれが培ってきた研究基盤と成果をより高次なものへ発展させることを目的として、連携研究を実施しています。現在、大型研究として次の3つが動いています。このうちの2つ目がこの研究です。

- ・「人間文化資源」の総合的研究（平成22～26年度）
- ・アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明（平成22～26年度）
- ・大規模災害と人間文化研究（平成24～26年度）

この研究が対象とするアジア地域は、ヨーロッパに比べて、より人と自然との相互性の強い文化を築いてきました。自然をある種、支配しようとする近代ヨーロッパに対して、それとは異なる世界をもちえたのがアジアです。このようなアジアの文化を「アジアの人びとの自然観」に焦点をあてることにより解明しようというのが、この本の目的です。

2. この本の構成

この本の構成は、次のようになっています。

はじめに

佐藤洋一郎

第1編 アジアにおける自然観の系譜

擬人化という装置 — 能に現れる草木霊を中心に

永原順子

生き物供養から見る自然観の諸相

相田 満

鎮守の森 — 森の世界に生きる、人とカミ

嶋田奈穂子

第2編 言語からみる自然観

昔がたりにみる自然と文化 — 鳥の声の聞きなしと方言

木部暢子

庄川流域における自然物主体敬語

— 方言分布から見る地域の思考・心情・生業

大西拓一郎

自然条件とことばの変化 — 甌島方言を例に	窪菌晴夫
紅花と河北町方言	ティモシー・J・バンス／宮下瑞生／ マーク・アーウィン／リチャード・W・ジョルダン
上海語の復興 — 言語文化の「雑多性」を考える	郭 南燕
第3編 東アジア海をめぐる人と自然	
座談会1 東アジア海の文化と歴史 — 地域を越えた普遍性と固有性	木部暢子×窪菌晴夫×小松和彦×佐藤洋一郎×中野孝教×安井真奈実
座談会2 フィールドとしての中国	郭南燕×窪田順平×佐藤洋一郎×松村伸
あとがき — アジアの自然観研究に期待する	秋道智彌

第1編には、文化人類学・民俗学の立場から「アジアの人びとの自然観」について考察した論考を収録しています。まず、「擬人化という装置 — 能に現れる草木霊を中心に」(永原・高知工業高等専門学校)は、能に現れる草木霊は、無生物にも仏性があるとする「草木国土悉皆成仏」の思想を背景とすることを指摘したもの、「生き物供養から見る自然観の諸相」(相田・国文学研究資料館)は、食料を目的とする殺処分だけでなく、害虫駆除や間引き、ベットの殺処分など、何でも供養する日本の習慣は、世界的に見て珍しい習慣であり、そこに日本人の思想が現れていることを述べたもの、「鎮守の森 — 森の世界に生きる、人とカミ」(嶋田・京都大学東南アジア研究所)は、日本とラオスの鎮守の森を取り上げ、各地の人々が鎮守の森にどのようなカミを見ているのかについて述べたものです。

第2編には、言語を切り口として「アジアの人びとの自然観」について考察した論考を載せています。言語を切り口とするといっても、アプローチのしかたはさまざまです。たとえば、「昔がたりにみる自然と文化」(木部・国語研)は、ホトトギスなどの鳥の鳴き声の「聞きなし」が方言によって異なっていることから、「聞きなし」をとおして地域の民俗や自然観を探ったもの、「庄川流域における自然物主体敬語」(大西・国語研)は、岐阜県、富山県の庄川流域の「太陽」に対する敬語表現を取り上げ、この地域の人びとの太陽に対する意識や敬意の在り方を探ったもの、「自然条件とことばの変化」(窪菌・国語研)は、海によって本土から隔てられた鹿児島県甌島方言のアクセントが、本土方言とは大きく異なっていく様子を描いたもの、「紅花と河北町方言」(バンス・国語研他)は、この地域で経済的に重要な役割を果たしている「紅花」の名称について述べたもの、「上海語の復興」(郭・国際日本文化研究センター)は、上海における方言使用の禁止と方言復興運動から中国社会が抱える問題を浮き彫りにしようとしたものです。

第3編は、2つの座談会の記録です。座談会1「東アジア海の文化と歴史」では、東アジア海(日本海と東シナ海)をめぐる地域の自然や文化に関して、木部、窪菌(言語学)、小松、安井(文化人類学・民俗学)、佐藤(植物遺伝学)、中野(同位体環境学)がそれぞれの立場から意見を述べています。また、座談会2「フィールドとしての中国」では、中国を一つのフィールドとして、その歴史、文化、外部との交流などと自然との関係について、郭(環境

文化), 窪田 (自然科学・水文学), 佐藤 (植物遺伝学), 松村 (アジア都市・建築・空間史) が意見を述べています。

3. この本の位置づけ

学問分野を越えて連携することにより, 研究をより高次なものに発展させるという試みは, そう簡単に成功するものではありません。この本でも, 必ずしも成功しているとは言えませんが, この本の刊行により, まずは大きな一歩が踏み出せたのではないかと考えています。

木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所副所長, 時空間変異研究系長。博士 (文学) (九州大学)。鹿児島大学名誉教授。2010年4月より現職。主な著書・論文: 『鹿児島県のことば』 (共著, 明治書院, 1997), 『西南部九州二型アクセントの研究』 (勉誠出版, 2000), 『日本語アクセント入門』 (共著, 三省堂, 2012), 『方言学入門』 (共著, 三省堂, 2013), 『じゃって方言なおもしとか』 (岩波書店, 2013)。

受賞: 新村出財団研究助成 (新村出財団, 1990)。

社会活動: 日本語学会理事, 日本音声学会理事, 日本学術会議連携会員。